

Bottom Black Re—call

黒本と赤鳥と

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

BBちゃんに幕間があつて、もし、彼女が先輩を視てしまったらの話。FGO形式で進行するので、どういう表情をしているのか等の描写はそこまでありません。地の文は殆どありませんし、主人公は選択肢で話します。また、文字の色変更も本家FGOのストーリーパートに合わせて行なっています。EXTRAパートは見えにくい色に変更しているので、気になる方は自動リーダー機能やメモ帳の機能をお手数ですがご利用願います。

オマケに、文章だけあつて立ち絵や背景などは一切ない状態なので、「此処こうなってるのかな？」みたいな所まで色々ご想像にお任せいたします。

最後に。ガールズラブのタグを付けていますが、彼か、彼女かはご想像にお任せします。

EXTTELA、及びEXTRACCCのネタバレ注意です。

目次

進行度 1	1
進行度 2	8
進行度 3	17
進行度 3 2	21

進行度 1

私は私。

他の誰でも無い、私。

白く清い少女ではなく、黒を選び壊れ捻れた月の癌細胞。

そして――

誰かに恋をしこれからも想いを胸に抱く乙女。

或いは、誰かへの恋を守る為この想いを胸に隠す乙女。

たとえその終わりは、偽れないと理解していても。

……この手は不要であつたとしても。

私は、手を伸ばした。

虚^ソ空^ラへと飛び立つアナタに。

逃れ得ぬ運命に、例外措置はないのに。

その言葉を他の誰かへと託させたかかった。

沸き立つ祈りに蓋を。思い願う自分に覚悟を。

私は、それでもその存在に虜にされた少女としてもう一度何かを試してみせたかかった。

B B

「はい、おはようございますセ・ン・パ・イ！

相変わらずのレムレムっぷり、赤子のように随分貪ってますねー？

いやーん！これにはB Bちゃんもびつくりー！

ブタのように飼育箱の中で寝惚けてる場合じゃないんですよー?!ほらほら、起きてくださいー！」

S e r e c t

▶? なな、なんで乗っかってるの?!

み…………みえ…………

B B

「あららー? マイルームに私がいることにはツツコミを入れないんですね?

…………いえ、まあ、アナタに惚れてる方は数多くですしね

色んなサーヴァントに這いよられ、ストーキングされ…………

ま、同情なんてしませんけど? 寧ろB Bちゃん的には愉悦です!

なんて雑談は抜きとしましょう。さっさと本題に入らせてくださいー！」

ロビンフッド

「マスター悪い事は言わねえ、今すぐここから出るぞ」

B B

「あつ、ミドチャさんこんなところにいたんですね！探してたんですよ、まったくもう！

マイルームにいるならそうと言ってください！」

ロビンフッド

「嫌な予感しかしないんでこいつと一緒に外行つていいですかね、行きますね！」

B B

「え？そんなのできないに決まってるじゃないですか。

だつてここ、B Bチャンネルの中ですよ？」

Secret

部屋の中に部屋があるなんてなんて建築なんだ！

▶？マスターは にげられない！

ロビンフッド

「回り込まれる以前の問題かよ?!」

B B

「はい！それじゃあ、協力してくださいねー？センパイ！

今だからこそじゃないと出来ないの、B Bちゃん的にはサクツと急いで済ませてほ

しいんです!」

ロビンフッド

「今だからこそ?」

B B

「ええ——どうかまずは指定されたサーヴァントの説得、お願いできますか」

S e r e c t

▶?という訳で……

S e r e c t

▶?協力してくれる?

この後なんでもするから、式!

ロビンフッド

(……誰に頼むのかと思えば両儀の御嬢さんにだと……?!)

両儀式

「あら、別に命令しなくてもしてあげるわよ」

B B

「あっさり?!」

両儀式

「……貴女は、知つてると思つただけれど意外だわ

言つているでしょう?」

私はマスターの為なら、どんな間違ひでも犯してしまふかもしれないとそれがたまたま、今日であつた。それだけの話よ」

B B

「な、なるほど〜センパイの頼みだからと……い、いやいや!

アナタの主義を曲げるような頼みで、

アナタのその、センパイとの逢瀬の形が崩れてしまふと思うのですが

……あの、本当にいいんです?」

両儀式

「そうね、でも——

貴女の『恋』の在り方は、あの子と彼に似ていた、というか

恋の相手の為を想うその行動は、ええ。

興味が湧いたの。」

ロビンフッド

（――恋の、在り方？）

両儀式

「ただまあ、その代わりと言ってはなんですけれど。

ちよつと食べてみたいものがあつて。」

S e r e c t

▶？ダツツなら「式」の部屋に

気になるものがあつたの？

両儀式

「ああ、アイスじゃないのよ。アレもたまに食べたくなるけれども。

なんでも、マスターへの忠誠心を見せる為に海魔を食べる習慣があると聞いたわ？

なので、そうね。

料理も悪くないと思つたの。」

B B

（誰ですかそれカルデアに広めた人?!）

ロビンフッド

（アンタでしょ!!!）

両儀式

「そうね、うんとでっかくて、コリコリしているの。」

キツチンの赤い弓兵さんから、大きい方がより美味しいって聞いたから……
彼を攻撃してみましようか？」

ジル・ド・レエ

「ん？マスタ―に他の皆様。このようなところで一体……」

ロビンフッド

「青髭の方にやそんな手助け言いたくないんですけどねえ。」

オイアンタ、死にたくないなら早く逃げろ！」

両儀式

「きつと、うんと色々なものを落としてくれそうね。」

S e r e c t

▶？ヒヤア！素材狩りだつて？!

B B

「ヤダ……私のセンパイ、蛮族……!!」

……まあ、うん。コレはたまたまなので仕方ないですね。

悪くは思わないでくださいね！」

進行度2

両儀式

「……なるほど、コレは中々に魅力的だったわね……」

忠誠心の証としては、確かに理にかなっていったわ」

S e r e c t

いっぱい食べたね

▶? 普通に美味しいのかあコレ……

ロビンフッド

「いや何でもかんでも素焼きにすりやいいってモンじゃないですし……」

しかし、まさかミソの部分があんなに濃厚だったとはな……酒が合いそうだけ」

B B

「私の使い魔ももしかしたらあんなに美味しくなる事がワンチャン……?」

あ、食べてる人いましたね。シエイプシフターの味はどうでした? センパイ」

S e r e c t

海苔っぼい桜餅

▶?え、言っちゃっていいの?

B B

「あ、いけないいけない。」

B Bちゃんったらうっかりしました。

そうですね、ええ。また今度私達の活躍がある時までのお楽しみに、という事に」

ロビンフッド

「……いや、そもそも自分の使い魔を食べようとするなよ。」

あと、その悪食に関しては後で話を聞かせてもらいますからね?」

両儀式

「……そうね。」

私ももう少し、アナタの力になれたらいいのですけど……

即死でも全体的な性能でも、今のままではどうにも劣ってしまう所が……

そうだわ、いつそ私も本気を出したらいいのね?」

ロビンフッド・B B

「やめて。」

B B

「えっと、それでなんの話でしたっけ。」

両儀式

「性能の強化に関しての話でしょう」

B B

「違います（違います）」

私からの要望はですね、レイシフトを行う為の存在証明をお願いしたいんです。

私ならセンパイに、その他諸々を繋げることが出来るのですが……あくまで介入までですね」

S e r e c t

▶？存在証明ならみんながいるよ？

介入？

B B

「うーん……カルデアの皆さんでは行える訳もない、と言いますか……」

今回事行おうとしている事がバレたらその、大目玉なんですよね。

なにせ魔術師が目指す領域に手を伸ばしているような行いですから」

ロビンフッド

「………わざわざご丁寧に正面から頼みこんできたのは？」

B B

「あなた方が信用出来る相手だからです。

それに私がしたい事は最後には無かった事にするので嵌めてまで行う必要も無いと
いいですか。

下手に勘付かれてややこしくなるのも困るんです。跡形もなく綺麗さっぱり消した
いので」

両儀式

「安心して、マスター。彼女の事を信じてても大丈夫よ。

この時間軸にはまず関係することも無い、例外的な行いだから協力してあげて？」

ロビンフツド

「……………まさか……………」

B B

「ああ、ミドチャさんはデータとして知っているんですね。いえ、思い出したといえます
か。

でも……………残念ながら、私がレイシフトしたいのはアソコであってアソコではないので
す。

此処にいる私の『先輩』は、方針を変更させる望みを願っていません。

人の月への進出ではなく、人の宇宙への進出を願っています。

……はい。私の恋は、あの時点で終わっているのです。

ですが、あの可能性では終わる事がなかった。そして、諦めたくない、あの人が、
——先輩が、幾度の終わりの中でも叫んでいたのが聞こえてしまったのです。」

S e r e c t

…よくわからないけど、わかった

▶？オレ達は、あまり関わらない方がいい？

B B

「出来たら一人でさせてほしいんです。」

コレは決着といますか、いえ。

——乙女の涙は殿方には見られたくないモノでしよう？」

ロビンフッド

「……仕方ないですねえ。」

横槍入れる馬鹿はオレ達で片しときますから、やるモンさつさと済ませろよ？」

B B

「ええ。ウルトラハイスペックチートボディのBBちゃんなら、一瞬で終わりますから。
せいぜい驚きの声を出さないようにする事ですね？」

「???????

ふふふふふ。

あの娘は……今も恋に溺れているというのですか。

ええ、いいでしょう。この私が、掻き乱してあげましょう？そして、ふふふ……

遊星の味、堪能してから月を総舐めして……ああ、今からも、体が疼いて、堪りませ

んわあ……」

「え。?????」
「ダメでしょ。」

殺生院キアラ

「」

メルトリリス

「リップ」

パッションリップ

「うん。合体宝具の用意は、大丈夫だよ」

殺生院キアラ

「随分と、御揃いのようですね？」

「?????」

「今回の話はカルデアの彼も関係してる。」

例外処理の無される場月の裏での物語はもう語られたんだ、

大人しく静観してくれるかな。

それに……僕にも少しだけ、」

エルキドゥ

「彼には借りがあるようなものだからね。」

殺生院キアラ

「……逃げ去った分際で、何を言うかと思えば、

泥人形が人間の感情の概念を理解するなど度し難いですわ。

ああ……それに加えて、人の感情を得ながらに人を否定しているのではたわね？」

エルキドゥ

「……なんとでも。だからこそ、今の僕が喚ばれ、ここに居るのだから。」

エミヤ

「私も『彼』には少しばかりの縁があるのでね。異なる私がいる世界には行けないが、聖

女を謳う毒婦一人足止めくらいはしてやれる」

エリザベート・パートリー

「アタシもよ。アナタなんかには、子ブタは渡さないわ！」

カルナ

「おそらく……おそらくではあるが、いや、

……ジナコもそれを望みはしまい」

エルキドウ

「そういうことだから、今は大人しく手を引いた方がいいと思うよ？」

殺生院キアラ

「く……ですが、私の獲物がこうして目の前にいるというのもまた事実。

マスターがいない以上、誓願も不要でしょう。まとめて頂いてしまっても？」

両儀式

(……あー、何故私はここに居るのだろうか)

「……まあ、こういう手合いを切ったことはないしな、オレも。まあ、切ることもなさそうだけど」

ハンス・クリスチャン・アンデルセン

「……で、俺はこの毒婦を諫める為に殺伐とした場に呼ばれたと。」

は。あいつらについていった方がよほどネタになる。帰っていいな。無理だろうが。」

殺生院キアラ

「げ。

ええ。ええ。是非ともそうしてくださいまし。私こそこの様な純情童貞お断りです。」

エルキドウ

「ほら、ギルのところまで行くよ二人とも

諦めてよ、殺生院キアラ。僕という鎖がここにいる時点で菩薩という神に連なる存在である貴女が僕たちを倒したとしても、現場に間に合うわけ無いと思うよ?」

殺生院

「……はあ、仕方、ありませんわね。行きますわよアンデルセン」

ハンス・クリスチャン・アンデルセン

「それは行くのではなく引きずっているんだ！ええい、やめろ！摩擦熱が！」

進行度3

夢を見た。

淡い思い出のような、遙か遠い過去の物語のような、忘れてたはずの温かな何かを思い出した。

胸の前で手の内に一欠片の希望をしっかりと握りしめながら、彼方に遠ざかった現在を見る。

それでも、俺／私はその夢に向かって寄り道をしてみたくなった。

なぜなのかわからないけれども、きっと、この夢が本来ならあり得ない夢だからこそ、行くべきだと感じた。

何よりも、この桜の香はどうしようもなく、惹かれてしまうのだ。

BB

「レイシフト、完了——」

大丈夫ですか？ センパイ？」

Secret

な、なんか吸い込まれそう……!!

▶?ここって、あの特異点の

BB

「厳密にはSERAPHではありません。此処は時空の狭間——

あの第二魔法使いカレイドスコップでもないし辿り着けないような領域です。

まあ、今回は特別といえますか?

あの人のお陰で此処に立っていられるも同然なものです。

とはいえ、データ容量がミジンコレベルなセンパイは立っていられるだけ、でしょう

けど?」

ロビンフッド

「おいおいおい?!?どういう事だBB、こんな所に《アイツ》が——」

BB

「、話をしている暇はありません!」

Serect

▶?SERAPHの攻性プログラム、どうして……!!

BB

「……やはり、妨害してきますよね。自分が行なっている事を、敵がしなないとも限りませ

んし。

ええ、だからこそ私は此処にいます。

こうして、再び彼の人に——先輩に、出会えるチャンスがあったとしても。

もう一度、同じ事をせずに再び先輩の為に戦おうと、彼の人を助けると、決めたんです。

……私の愛の形が致命的な程に壊れているのは知っています。理解しています。

壊れたAIが今更彼の人の物語に出る席が無いなんて、当然なんです。

それでも私は、此処に立った。

この恋を守る為に何かしたかった。

次は間違えた方法をとってまでもなく、先輩の意思を捻じ曲げる事もなく、

先輩を、サポートするんです!!!」

S e r e c t

▶??:……BB

ロビンフッド

「……成る程、あのBBが最後にスッキリさっぱりなかつたことにするのを前提で動くとは思えば

……アンタらしくもないなBB、お前は……それで、いいのか?」

B
B

「……はい、それでいいんです。私の恋は彼処で終わりましたし、それに——

私の娘達が成長したのに私だけこのまま、なんて訳にはいけませんし？

あ、でも——白野先輩へのこの恋はまだ、諦めた訳ではありませんからね？勘違いしないでくださいよ？

さあっ！かかってきなさい、ヴェルバーの手先達！先輩の決意を邪魔なんてさせません！」

進行度 3—2

B B

「これで……最後です！」

B B

「先輩を時間の海の藻屑にしようなんて言語道断！そこは私の中で藻屑にするんですからー！」

ロビンフット

「其処は藻屑にしないでおけよ?!」

つとに、これでいいんだな？ B B

S e r e c t

▶? あれ、は……?!

ロビンフット

「……あれ、は。あの流星はまさか、おい B B、アイツは——」

B B

「……ええ。これでいいんです。ロビンさん。彼の人はそれを決めたんですから」

ロビンフツド

「お、前。んな、いい訳ないだろうが、オタク。遂に致命的な欠陥ができたのか？」

BB

「はあ？なんですか急に喧嘩なんて売ってきて。このグレートデビルなBBちゃんに欠陥なんていくらでもあるに決まってるじゃないですか

それすらも忘れてしまったなんて……長い付き合いだと思つてたのですが、がっかりです

でも、いいんですって、これで。私はこれで満足ですから。これで、用事は済みましたので帰って……、

って、え……？」

S e r e c t

▶？星がこつちに、来てる……？

ロビンフツド

「マスター、オレ達は先に帰ってましようや」

S e r e c t

▶?えっ、なんで?!

ロビンフッド

「あー、こういうのはアレだ」

ロビンフッド

「ちよつとくらい、いい夢を見たっていいだろう?つてヤツですよ」

B B

「え?ええ??ちよ、待つてくださ、ああつ、ちよつと両儀式さーん?!ああ、コントロールが効かない……ちよ、置いてかないでください、私……!」

行ってしまった。

光に包まれて消えていくマスターである人の手を握りながら此方を意味深に見ながら笑った緑の弓兵に助けを求めながらも何も得られることはなかった。

だって、だって。そんなのはいけない。そんな、私があひとに会ってしまったなんて、絶対にあつてはいけない。あひとは、そもそも私の事を知らないのに、私は、この恋に狂つてはいけないと自分を制した筈なのに。

胸が高鳴る。

心の中で、その手を取ってほしいと叫ぶ自分がいる。

光は、その形は、いつまでも焦がれていた姿でこちらに両手を差し伸べていた。

「あ、あ……」

ダメです、ダメですダメです、ダメなんです。

そんなのはいけません、そんな、昔みたいに私に気がついて、こちらに手を伸ばすなんて、そんな、そんなのは……!!

「> — 桜」

その場に崩れ落ちた。その身体を、先輩は、抱きしめてきた。

ああ……、ああ。

「ダメだって……言って、いるのに……」

「ダメなんです。私はほんとうに、ダメダメなんです。今度は絶対に先輩の事を追い求めてはいけないって、自分で自分に言い聞かせてたのに。ほんとうにただ、一回、あなたに何かを返したかっただけです。なのに、なのに、そんなことをされたら、私のことを知らない先輩でも、私……!」

「> ありがとう。」

「> また、助けてもらったね」

「っ、ああ、あああ。」

嗚咽が止まらない。どうしてこの人はいつだってほしい言葉をくれるのだろうか。な
 んで、先輩はこんなにもピカピカで、綺麗で、こんな酷すぎる。眩しくて、涙が止ま
 らない。もつとその顔を見ていたいのにもつと、その声を聞きたいのに。

「なんでそんなことをいうんですか。こうして、もつと、もつと、話していたいなんて
 思ってしまうじゃないですか。このまま、消えるはずの先輩を独り占めして、ずつと
 ずつと、一緒にいたい、なんて、繰り返しちゃうに決まってるじゃないですか。」
 震える手を伸ばす。その唯一の手段を台無しにしてしまわないようにと考えられたの
 はせめてもの配慮だった。

そうして私は彼／彼女の身体をほんの少しだけ、掬い上げてしまう。

もう一つの結末を、月の勝者を、せめてもと彼処に繋ぎ止めてしまう。

それが、私に許されたただ一つの理性。

それを、あの人はやさしく受けとめた。

S e r e c t

▶?う、うう……

此処は……??

両儀式

「あら、目覚めたのね」

S e r e c t

▶?カルデアに、戻ったのか……?

BBは、

両儀式

「ちよつと申し訳ない気もするのだけれど……束の間の逢瀬に別の人が居てはいけませんもの

ちよつと乱暴になったけれど、許してちようだい?ああ、彼女はちゃんとカルデアに戻れるから安心して」

ロビンフッド

「あー……ま、ここから先は語られることがない方がアイツにとつてもありがたい、というヤツだ。

わざわざBBの頼みを聞いてやってくれて、有難うなマスター。きつとそれどころじゃあないだろうし、代わりにオレが礼を言うぜ」

両儀式

「きつと、語り合った言葉も彼女は起こりえなかった事として片付けてしまうのでしょ

うけど。

その事実は、彼女の中で確かに何かを変えたはずよ。

……そうね、きつと、この恩の為に彼女は今後もあなたと共に戦ってくれるでしょう

ね

だからどうか、なにがあつたのかはわからないでいてあげて？」